故郷とゝふもの　千素亀雄自筆原稿

西垣文庫
文庫10
8838
2

題名 故郷の
百五十字
手、和手共
二十二行
三段組

第~~七~~五頁
~~上段目~~
~~第~~ 経上 ~~七~~ 段目
~~第五~~
中段中
段マデ
No.

故郷という

千葉亀雄

故郷を持たないことは、人生の一つの不幸ではなかろうか。ヘルマン・バングであつたか、曲同籍者といふ小説を読んで、同籍を持たずに一生を淳伯する人々の、淋みの念はなほ人生を、しみじみと思ひ出す。

猶大人が有りあまる金富に満ち足りながら、なほ念にパレスタインの渡航を念願する気持もわかるのである。

私

は、東京まれの青年達に、よく考へて見るのである。故郷を持たないことを、天達は不幸に想はないか、と。故郷の情を持たないのに、対比すべき都会が無いわけであるから、もと質問は無理だと思ふのであるが、また、たとへ東京人は故郷は持たなくとも、友人達を通じて故郷の観念はわかつてゐる筈である。で、不幸だといふ人が半分、断定と、不幸でせいぜい考へる人が半分。尚者は之ふのである。自分には見体みなどになつて、帰省する

故郷があつたらば、と、しみじみと思ふのである。後者は、まるで故郷なるといい観念を始めから問題にしない人がそうした思住した事は持にみることも考へられない事はないが、しかし、不幸な人たち、想い返さぬわけにも行かないのである。人生の悩みは、すべての複雑さから生ずる。多角な活用の対照によつて、はじめて、物の価値は判別すると思ふからである。都市生活は、都市生活を独立させたのは、この全部が解

らない。地方生活を対立させて、はじめて、都市生活の、哀しみをわかって来るのではないか。だから私は、三重生活、三重生活を非難する人を、いつも笑ったことがある。

重生活を非難する人を、いつも笑ったことがある。

三重から三重、三重から四重、これが後年になるに従って、生活内容の豊富さを加えるのである。この事は、都市生活を対立させることによって、地田園生活のよさが、一層はっきりと理解されるといふ逆の意味になる。

両者は、異によって情を深め

情によって異を深めようとするが、私は、田園生活の故郷を持つことによって、都市生活のよさがはっきりと見せられ、都市生活の良に浸ることによって、故郷である田園生活の良さを、なほと、深く味ひ出ることが出来るのである。

単に故郷といっても、同じ故郷里であるながら、人格には、時間の故郷がある。空間の故郷がある。時間の故郷は、子供の時代である。空間の故郷は、地元の故郷である。

前者はどんな人頭でも所有する故郷であるが、後者は、所有者と非所有者に分たれる。東京人の如きは後者である。われ等は幸いに、この二つを所有する片隅の住人せ者である。われ等は、暇な時に、じっとこの思想の楽しい夢に浸り得る。なぜ、たい前者は、その[illegible]の特徴として、われ[illegible]の思想に生ず私は、二度と帰って来ない故郷であるが、後者は、現実する故郷である。

が、ここへ来ると、一つの所有につき有る

このである。前者は、二度と生まれない故郷であるために、二度生まれることの出来ない悲しみを持った悲しみが湧いのであるが、たとつは、或る支那人の東の清に、一たひ清い溶穴からにんこんと流れ出した清冽の水が、この[illegible]、海となり、混濁の波にまれ沈んで、再び海底を思うても、元の愛女性に見るよりかはない。とうどうたる波浪の渦さりは、故郷を失った泉の、絶望と、仲介の集結とはなからうか、といった地の[illegible]、これに似た感

もっと、それも脳の中に秘めて居るには勿論なのですが、しかし、それは用い帰らない存在である。と同時に、その脳髄は、どんな場合にあっても、その一片をも、傷つけ、失はせることの出来ない幻影だといふ意味で、神聖に完全に持ち帰ることは出来る。地震の故郷は、そうはいかない！ それは現実として、永遠に在る故郷であるために、望郷の念を絶えず、時間の度毎に、小さに安を変へ

て行く。地震の故郷としての悲しみがうこに生れる。東京人だって、時間的には、いの故郷がある。古くは江戸、新しくは、明治、大正、昭和、刻んに、東京から大東京へ変形して行く振幅の激しさ、ビイドロ状の報告、無にあって、永井荷風氏や、谷崎潤一郎氏のような純東京人が、新らしい大東京に向い眼を向け、故郷の情けない態度を吸ひ、また、久保田万太郎氏のように、無邪気に水とともに、行って帰らない江戸趣味を、惜しみなくめざめと

治まれて、いつまでも感慨深くつまない文章を生れて来るわけである。同じ楽しみは、地方を故郷に持つ我等の上にも宿る。年毎一日の如く、病として大丈夫だ〜、なんて生活は、けふの世界のどこにもない。私は故郷に帰らぬことかゝ三十年余りとなるが、もともと東北の貧村である。だからして、楽しいつながりとする為には、楽しめなければ、絵草が痛んと山の祝まで眼の路の限り延びて、雪崖が身の丈の少矢のつゝに芽吹に元い立つた麦畑

であつたところも、今は汽車鉄のレイルが横に布かれて、赤田工なペンキ作りのバラックが建ち並んで居るといふし、一体、文化といふものは、一つの基準生活である故に、すべての異型の変つたものは伝つ端から初伝されて、一列、一体、変化のない単調な様式に人生を作らんとする。男の洋服などが、何れも一日、甲様式が通はぬ所にして、等、等、で、祈願の十年と回まいこんでゐる心の故郷の姿といふ所も、現実の上では、片なしに初伝し

錆びた

てうつたらしくゆかある。また田園生活の故郷の田園は、自然といふものが、その中心になるののない地方では、貴生にとの自然からが、無変な故郷の語彙の及ぶ先にかゝつて来るのだからたまらぬ。

が、これは、単に我の故郷だけの事ではない。私がゐるのとこへ行つても、他れの故郷である筈の大自然は、大抵の場合、時代明生活

の負担を受けて、全方もない変型を受けてゐる。

を見つゝある。つまり、どの人の心の故郷も、時間的に歪みを受けられつゝある筈であるが、一方、現代の人々は、さうした現実に対してすら、吃驚に不感性になつて居るから、思内な奉仕である。過去にもつゝは自然が人生と対立したために、また、自然は人生に面けれはなりない依存物であつたために、自然は愛撫され、陵辱され、愛撫され、虐たのである。現代では、自然は人生の対立

物としへ存在しない。自然は他の生物のように、人生生活の征服的対象として見られて来たのである。うになった。かつて、小説は、信仰と崇美の本体であったものが、今日では、征服の武器としての奴隷としての存在である。これも生活の仕方といへば仕方がないが、こんな風に、一切を一元的に、人間本位に帰納する生き方は、浙じて人生の活力を奪へゝしなければ、活味をかへてかくれない。この単調さは、故郷を持たない東京人のように感じいへる。

私の生涯、朝、たい焼の印象にはまる、地獄の故郷を宝玉のごとくほしんで、性きる所々、心の安らかな逃避行としのち、こうして、この幸福を、逃みはじとする私でもある。

（ふくたひら）

No. .....

創稿用紙　10 × 20